

『水滸傳』の人物呼稱に見える待遇表現

佐高春音

はじめに

本稿は『水滸傳』の「地の文」で用いられる作中人物の呼稱を切り口として、作品の「語り」へのアプローチを試みるものである。^①呼稱には対象人物に向けて呼びかけを行う機能と、敘述の対象を指示する機能があり、今回検討するのは、物語の語り手が作中人物について語る際に、どのような言葉を用いてその人物を表すのかという問題である。

呼稱が敘述対象を指示するとき、そこにはある種の価値判断や認識などの要素が加わってくる^②ことがある。本稿ではそれらの要素を「待遇」と呼び、待遇が表された言語表現を「待遇表現」と呼ぶ。これらのチームは主に日本語研究や國文學研究で用いられているものであり、研究者によって多少の相違はあるものの、概ね次のように説明されている。

待遇表現とは、表現主體（話し手または書き手）が表現受容者（聞き手または読み手）或いは表現素材（話題の人物）と自らとの間に尊卑、優劣、利害、親疎等どのような関係があるかを認識し、そ

の認識を言語形式の上に表したものである。^③

待遇の種類は、人物を褒め稱えるプラスの待遇と、人物を罵ったり貶めたりするマイナスの待遇に大別できる。プラスの待遇は敬語（呼稱の場合には敬稱や美稱、マイナスの待遇は罵詈や輕蔑語（呼稱の場合には罵稱や貶稱）として表れる。例えば「あの男は言った」「あの野郎はほざいた」という文章では、前者が淡々と事實を伝えるのに對し、後者からは人物の存在や行動に對する特別な認識が傳わってくるはずである。

通常後者のような表現は、作中人物の發話を直接的に再現する「セリフ」の中で用いられるが、『水滸傳』においては、時に「地の文」の中で語り手の言葉として用いられることがある。これまでの研究ではほとんど目を向けられることのなかつた「語り手の待遇を表す呼稱」に着目することで、そこから見えてくる諸問題について考察してみたい。^④底本には容與堂本『水滸傳』（百回本）を用い、比較検討が必要な際には適宜他版本を参照する。

一 地の文における呼稱の種類と用法

待遇を表す呼稱について論じる前に、呼稱使用の全體像を整理する。『水滸傳』の地の文で用いられる呼稱には以下のものがある。

【固有名詞】◎名前やあだ名（宋江、王矮虎、扈三娘、鄆哥）

◎姓＋職業身分名（魯提轄、洪教頭）

【普通名詞】◎基本屬性（這人、那漢、漢子、老人、婦人）

◎職業身分名（太尉、知縣、和尚、酒保、頭領）

◎親族名稱（女兒、娘、夫人、嫂嫂）

【數詞】（一個）、【人稱代名詞】（他）、【的フレース】（挑酒的）

普通名詞による呼稱の場合には、「這」や「那」の指示代詞を伴うか、文脈によつてどの人物なのか對象を特定できるようになっている。物語全體で最も一般的に用いられているのは、固有名詞、年齢・性別などの基本屬性を表す「這人」「那漢」、職業身分名による呼稱である。梁山泊の頭領たちなど、物語の主役人物は主に名前で呼稱され、彼らと關わる町や村の住人などの脇役人物は、主に職業身分名或いは基本屬性のみで呼稱される。

主役人物であつても、初登場の際、セリフや語り手の説明、詩詞などによつて素性が明らかにされる前は「這人」「那漢」などで表され、素性が明らかになつた後は、基本的に名前やあだ名の固有名詞に統一される。ただし、素性が明らかになつた後も、物語のサスペンス性を高めドラマ性を盛り上げる必要性があるシーンでは、敢えて名前を伏せ、どの人物かわからないようにして語りを進めることがある。「智

取生辰綱」故事などが典型的な例で、七人の棗売りの正體が明らかにされないまま物語が展開し、話が盛り上がりつてきたところで「我且問你、這七人端的是誰？不是別人、原來正是晁蓋、吳用……（尋ねるが、この七人とは誰のこと。他でもない、なんとまさに晁蓋、吳用……）」（第十六回。以降「二六」のように示す）と種明かしが入る。

基本的な呼稱使用とは異なる例として、同一人物に對する呼稱が頻繁に變わるケースも見られる。以下の例は魯達（後に出家して魯智深に改名する）と史進の初對面の場面であり、「魯達」と「魯提轄」の呼稱が頻繁に交替していることが分かる。セリフ部分を省略して紹介する。

魯提轄道「……」史進拜道「……」魯提轄連忙還禮說道「……」
史進道「……」魯達道「……」魯提轄挽了史進的手、使出茶坊來。
魯達回頭道「……」（二二）

この場合、必ずしも明確な選擇基準をもつて兩者が使い分けられているとは考えがたい。⁶⁾同じ呼稱が過度に重複することにより文章が煩わしく單調になることを嫌つた結果、或いは現行『水滸傳』の素材となつた藝能との關係などが要因として考えられるだろうか。このような言い換えは、吳用（「吳用」と「吳學究」）、武松（「武松」と「武行者」）などにもしばしば見られる。

呼稱が頻繁に交替するケースには、より明確に意圖的な使い分けがされている例もある。以下に挙げるのは、生辰綱事件の犯人逮捕を命じられた捕り手の何濤及びその妻と何濤の弟の會話場面である。

只見老婆問道「……」何濤道「……」老婆道「……」正説之間、只見兄弟何清來望哥哥。何濤道「……」何濤的妻子乖覺、連忙招手說道「……」何清當時跟了嫂嫂、進到厨下坐了。嫂嫂安排些肉食菜蔬、盪幾杯酒、請何清吃。何清問嫂嫂道「……」阿嫂道「……」

……那婦人這話說的蹊蹺、慌忙來對丈夫備細說了。(二七)

何濤の妻は初め何濤を基點として「老婆」と呼稱されているが、何濤の弟である何清が登場してからは、基點が何清に移動し、何清に与つての關係性である「嫂嫂」の呼稱に變わり、場面が轉換したところ「婦人」の呼稱になる。敘述の中心人物と言及される對象人物の關係性によつて呼稱が變化しているのである。

特に女性人物が呼稱される場合には、「誰々の妻」「誰々の娘」など男性人物を基點とした關係性で表されることが多い。これらは、多くの女性にとつて家族内での立場を明らかにする名以外は重要ではなかつたという、當時の社會における女性呼稱の狀況を反映していると思われる。

以上の呼稱使用は、恣意的な呼び換えか意圖的な呼び換えかという違いはあるものの、待遇の面ではほぼ等價である。名前を伏せた語りにおける「那人」とその正體である人物名、「魯達」と「魯提轄」、「老婆」「何濤的妻子」「嫂嫂」「婦人」などは、いずれも人物及びその屬性を表す語であつて、使われ方に大きな差異はなく、美稱貶稱の區別はない。しかし、例えば「那人(あの者)」と「那厮(あやつ)」などでは、これらの呼稱が等價であるとは言いがたい。本稿が注目するのは、このような「等價でない」呼び換えが行われるケースについてである。

二 「待遇」を表す呼稱とその分布

前述の通り、通常『水滸傳』の語り手は、人物名や職業身分名、「這人」「那漢」などの比較的ニュートラルと言つて良い呼稱を用いて作中人物を表すが、時にそれらの呼稱と等價とは認め難いマイナスの

待遇を表す呼稱(以降「マイナス呼稱」と呼ぶ)によつて人物を指示することがある。

『水滸傳』の地の文に現れるマイナス呼稱をまとめたものが、文末の一覽表である。表中の*マークの意味については後述する。

まずは、使用される呼稱表現について簡単に説明しておきたい。表中に多く現れる「這厮」「那厮」の「厮」は、元來男性の奴僕を指す語であつたが、後に意味が擴充され、賤稱としても使われるようになったものである。劉福根『漢語詁詞研究』によると、奴僕以外の人物を「厮」の語で罵るようになったのは宋元以降のことであるという。

「賊」について、『小説詞語匯釋』は「賊驢」の項目で「小説中罵人多用『賊』字(小説の中で人を罵るのに多く「賊」の字を用いる)」と説明する。「賊秃」は僧侶を罵る語、「賊臣」は「奸臣」と同じく臣下を罵る語である。「潑婦」の「潑」は「賊」と同様、單獨あるいは他の語と組み合さつて人を罵る語となる。「鳥男女」の「鳥」は男性の生殖器の俗稱であり、やはり罵語として用いられる。「蛮子」は北方人が南方人を罵つて呼ぶ表現である。

本稿ではマイナス呼稱として扱う條件に、それらが人物を罵つたり卑しめたりする際に使われることのある呼稱であること、研究論文や辭書類の中で罵語として取り上げられていることを考慮した。社會的地位が低く蔑視されることの多い職業身分名、例えば奴僕の身分である「小厮」「丫鬟」「男女」、ごころつきを意味する「潑皮」「搗子」、娼妓や虔婆(遣り手婆)などは罵語として取り上げられることもあるが、これらの語と筆者がマイナス呼稱として判断した「這厮」などは使われ方が異なつており、マイナス呼稱には分類しない。

兩者における最も大きな違いは、「這厮」などには同様の屬性を表

すよりニュートラルな呼稱が存在し、別の呼稱による言い換えが可能になっているという点である。「這厮」は「這人」、「賊秃」は「和尚」としても、同様の存在を指示するのには支障がなく、實際に作中でも同一人物たちにそのような呼び換えが行われている。例えば西門慶には「那人」「那厮」「西門慶」と複数の呼稱が用いられる。一方、社會的地位の低い職業身分名の呼稱は、基本的に個別の名前が用意されていない無名の脇役に用いられ、あくまでも固有名詞のかわりに彼らを表す記號として用いられているのである。

ただし、奴僕ではない人物を奴僕と呼稱するような場合には、マイナスの待遇を含んでいると判断してよいだろう。高位官人の張幹辨と李處候を「男女」と呼ぶのがその例である(表②)。また、基本的には名前などの比較的ニュートラルな呼稱が用いられているにも関わらず、局所的に社會的地位の低い職業身分名が使用される場合も同様である。白秀英は「白秀英」と名前と呼稱されるが、知府と良い仲であるという説明があつた後、あえて「那娼妓」と職業身分名で呼稱されることでマイナスイメージが強調されている(表⑧)。

なお、これまで筆者は人物名や職業身分名、「這人」「那漢」などの基本的な屬性名に對して「ニュートラル」という表現を用いてきたが、必ずしもそれらが一切の待遇を持たない(即ちプラスでもマイナスでもない)待遇零度の語であるという意味ではない。例えば「和尚」という呼び方に關して、高島俊男氏は「中國の和尚は、「ぼうず」あるいはいつそ「くそぼうず」という感じがある。敬意を帯びた呼稱ではけつしてない」と述べており、むしろマイナス呼稱として捉えている^⑩。ただし、「賊秃」と比較した場合には、「和尚」の語が持つマイナス待遇の度合いは、やはり明らかに低いと考えられる。絶對的にニュート

ラルな語を指定することは困難であるものの、『水滸傳』で用いられる呼稱の數々には、相對的な待遇の程度、待遇の段階が存在しており、それらを無視することはできないのである^⑪。

次に、一覽表の結果から見えてくる傾向について検討する。『水滸傳』の地の文でマイナス呼稱が用いられる對象は、*マークをつけている別途考慮が必要な例を除き、全て梁山泊メンバー(集結前の段階も含む)と個人的或いは組織的に對立する存在となっており、その使用には以下三つの傾向が見られる。

(一) 蔡京・童貫・高俅・楊戩に對し、主に第百回で「賊臣」「奸臣」が集中的に用いられる。

『水滸傳』の結末は、多くの犠牲を出しながらも反朝廷勢力を征して凱旋した梁山泊勢が、蔡京ら四臣の陰謀によつて散り散りに、總大將宋江と副將盧俊義は毒殺される、という悲劇的なものである。第百回に集中する「賊臣」「奸臣」の語は、四臣の惡玉としての立ち位置を明確にすると共に、彼らに陥れられた梁山泊勢がいかに「正しく」、故にこの結末がいかに「悲劇」と呼ぶにふさわしいものであつたかを強調する働きがあると考えられる。

(二) 征方臘故事(第九十一回〜第百回)及び百二十回本が有する征田虎・王慶故事(百二十回本の第九十一回〜第百十回)で用いられ、征遼故事(第八十三回〜第九十回)では用いられない。

百二十回本では、征遼戦と征方臘戦の間に、河北の田虎を討伐する話十回、淮西の王慶を討伐する話十回の全二十回が挿入されており、ここでは「這厮」「那厮」が田虎に對して一回、王慶に對して三回、糜賍に對して三回と高い頻度で用いられるほか、「草頭天子(盜賊天子)」「烏合奸徒(烏合の惡黨)」などのマイナス呼稱も現れる。

マイナス呼稱が方臘と田虎・王慶に用いられ、遼には用いられない要因としては、吳用のセリフ「若論我小子愚意、從其大遼、豈不勝如梁山水寨（私の愚考を申し上げれば、大遼に従うのは、梁山の水寨よりましではないかと思うのです）」（八五）に代表されるような、中鉢雅量氏が言うところの「宋江軍の、遼國に對する敵愾心の希薄さ」の反映、ひいては作者（寫定者）の遼に對する認識の反映とも考えられるが、いまだ答えを得るに至っておらず、今後引き続き検討していきたい。

（三）悪女や色事に關係する男女に多く用いられる。

これは筆者が最も注目している傾向である。不義密通のエピソードで有名な張文遠と閻婆惜、西門慶と潘金蓮、裴如海と潘巧雲、李固と賈氏以外にも、以下の人物は悪女や色事に關係する男女として考えられる。名前と簡単な紹介を載せる。

高衙内・林冲の妻をものにしただけでなく、「他人の妻に手を出してばかりいた」と語られる好色人物。劉高の妻・山賊に捕まっていたところを宋江に助けられるが、その後宋江を賊の親玉だと糾弾し、捕えて處分するよう夫を扇動する。白秀英・雷横の母を侮辱したことから雷横に殴り殺される。知府と良い仲であったため、雷横の處遇は厳しいものとなった。白玉喬・雷横の死刑を求める白秀英の父親。張旺・川賊。奪った金品を娼妓李巧奴の所で使い込んでいた。李巧奴は安道全が懇意にしている存在でもあり、安道全の梁山泊行きを阻んだことから張順に殺される。

この他、方臘の將軍である杜微の身を隠していた先が娼妓の家という設定になっている點、百二十回本で敵對勢力の頭として登場する王慶が「王慶好的是女色（王慶が好むのは女色）」（二〇一）と説明されている點にも注目したい。

『水滸傳』の人物呼稱に見える待遇表現

筆者はかつて、『水滸傳』の語り手が作中人物の性格・性質を直接説明する地の文（主に「A是个××（的人）」の形式をとる）が、「酒色財氣」に關わる場面、中でも「色」に關わる男女のエピソードに集中的に現れること、それらの敘述によつて作中人物の「色を好む／好まない」という性質が對照的に強調されていることを指摘した。本稿の結果もまた、そうした現象と連動するものであると考えられる。『水滸傳』における男女のエピソードには、とりわけ特徴的な語りが見られることが、改めて確認できたのではないかと思う。

三 「待遇」する主體

これまでに見てきたマイナス呼稱による待遇は、何者によるものと考えるべきなのだろうか。地の文の中で用いられるからといって、全てが語り手による待遇であると結論して良いのだろうか。待遇の主體について検討していきたい。

まず考慮しなければならないのは、地の文とセリフの境界線が曖昧な部分、間接話法と直接話法の區分自體に問題が想定される部分についてである。間接話法は語り手が言葉を選択したうえで作中人物の發話内容を傳達する形式（例…晁蓋、便問那漢、姓甚名誰、何處人氏（一四））、直接話法は作中人物の發話をそっくりそのまま再現しようとする形式（例…晁蓋道、不敢拜問先生高姓？貴鄉何處？（一五））であり、間接話法による言説は語り手に屬し、直接話法による言説は作中人物に屬すると考えられる。

しかし、『水滸傳』にはどちらの言説に屬するのか判断に困るケースも存在する。一覽表で*マークをつけているものがこの類である。いくつか例を挙げてみよう。

① 衆人把武松推搶入去、剝了衣裳、奪了戒刀包裹揪過來、擲在大柳樹上、教取一束藤條來細細的打那廝。却纔打得三五下……(三三) (吉川幸次郎、清水茂譯…人々、武松をそこへむりやり連れ込みますと…：藤のむちを取つて來い、こいつをきびしくたたんだと、四、五回たたいたとき……)

一般的な間接話法であれば、「打那廝」の部分は「打他」「打武松」などのようにするのが自然なのではないだろうか。下線部「取一束藤條來細細的打那廝」はむしろ直接話法によるセリフに近く、吉川幸次郎、清水茂譯『完譯水滸傳』でも直接話法的に譯されている。

② 柴進一來要看林冲本事、二者要林冲贏他、滅那廝嘴。(九)

③ 宋江已知中了奸計、必是賊臣們下了藥酒。(二〇〇)

右のような例も地の文とセリフ(或いはモノローグ)の區別がつきにくく、例えば傍線部の前に「道」「心中道」をつければセリフとしても機能するような表現になっている。「教」「叫」などの使役動詞や「要」などの思考動詞、「説」などの傳達動詞で引用のマーク「道」を伴わないものの直後が直接話法的になる例は他にも見られる。

小松謙氏は容與堂本『水滸傳』に見られる間接話法と直接話法の混在について言及しており、「講談が口頭で語られる場合……はじめ間接話法で始まったものが、途中から直接話法に變化していったとしても、聞き手はそれほど違和感を覺えないのではないか」と述べ、話法の混在には口頭藝能における白話文のパターンが影響しているだろうこと、讀むためのテキストにはそぐわないこれらの要素が、百二十回本や金聖嘆本では直接話法に變更されるなどの修正が加わる傾向にあることを指摘している。その他、申丹氏や中里見敬氏は中國語の特徴として「從屬節意識の弱さ」を擧げており、從屬節が傳達部から獨立

し、その部分が直接話法による作中人物の聲のように解釋できる現象について論じている。

これらに關しては、百パーセント地の文であるとは断定し難く、「地の文におけるマイナス呼稱」として扱うのには、慎重な態度が必要とされよう。しかし、『水滸傳』に見られるマイナス呼稱の使用が、全て直接話法と間接話法の混在から來ているわけでは勿論ない。

③ 原來這人是京師有名的破落戶潑皮、叫做沒毛大蟲牛二……此滿城人見那廝來都躲了。(二二)

「原來」は主として語り手による解説や評論の文頭に用いられる語であり、この一文は明らかに語り手の言説に屬す。それでは、「以此滿城人見那人」とせず、「以此滿城人見那廝」とマイナス呼稱で牛二を待遇している主體もまた語り手と言えるだろうか。この部分は語り手の言葉でありながら、牛二を見る「滿城人」のマイナス感情が「那廝」の語に強く反映されているようにも感じられる。

④ 武松帶一行人都到店裡看時、滿地盡是酒漿、這兩箇鳥男女正在缸裡扶牆摸壁扎掙。(三〇)

この「兩箇鳥男女」にも、彼らを見る武松のマイナス感情が表れているように感じられる。武松は「兩箇鳥男女」の主人である蔣門神に對して「休言你這廝鳥蠢漢」などと罵っており、彼の荒っぽい言葉遣いまでもが反映されているような印象を受ける。ここでは、語り手が作中人物の視点を反映させた呼稱を用いることで、語り手と作中人物の聲が二重化していると考えられる。このような「二重の聲」が現れる部分において、待遇の主體は語り手でもあり作中人物でもあるということになるだろう。

それでは、マイナス呼稱は、呼稱對象を「見る」主體、すなわち視

點人物となる作中人物の待遇を反映したものとと言えるだろうか。マイナス呼稱が用いられるのは、上記の例のように「見／看」といった視覚に關わる動詞によつて視點人物が明示されるわけではない場合や、文脈上特定の視點人物が想定されない場合も多い。また、單に視點人物といふことで考えれば、梁山泊メンバーと對立する悪玉人物の視點で物語が展開することもある。彼らにとつては梁山泊メンバーこそがマイナスの感情を抱く對象であつて、セリフでは様々な罵詈雑言をぶつけてくるが、悪玉人物視點の地の文において、梁山泊メンバーがマイナス呼稱によつて指示されることはない。

つまり、語り手が反映しているのは、その場ごとの視點人物というよりも、梁山泊メンバーの感情や認識であり、實際にその場面で梁山泊メンバーが見ているか見ていないかには關係なく、彼ら中心人物たちに「肩入れた語り」になつているのである。嚴密に言えば、先に筆者が「二重の聲」であるとした、牛二を「那厮」と呼ぶ聲は、語り手の聲であり、「滿城人」の聲であり、牛二と對立する楊志の聲でもあるといふ、三重の聲、三重の待遇が想定され得る。

四 マイナス呼稱の機能と効果

『水滸傳』の語りの中でマイナス呼稱が果たす機能について、筆者は以下のように考える。

一つは、呼稱對象となる作中人物の物語内における位置づけを、より明確なものとして讀者へ傳達するというもの。ニュートラルな呼稱ではなくマイナス待遇の呼稱が用いられることによつて、その對象となる人物が『水滸傳』における悪玉人物であることは、物語の決定事項のようなものとして讀者に傳達される。悪玉人物の悪玉としての位

置づけを強調すると同時に、それらと對立する梁山泊メンバーの善玉性、正當性を際立たせる効果がある。

もう一つは、讀者と物語世界の距離を縮め、讀者と語り手の距離を縮めるといふもの。悪玉人物を貶める呼稱、即ち善玉人物側・主人公側に肩入れた表現をとることで、主人公側に感情移入している讀者の共感を煽り、讀者をより物語世界に入り込みやすくする。悪玉人物に對するマイナス感情の共有を通して、作中人物・語り手・讀者の距離を縮め、一體感を生み、場の一體化を可能にするのである。

一般的に、讀者が物語世界を最も直接的に感じられるのは直接話法による會話部分であると考えられている。作中人物たちのセリフの應酬は、まるで今日の前でドラマが繰り廣げられているかのような感覺をもたらず。直接話法↓間接話法↓地の文による描寫↓説明↓論評と語り手の介入が強くなるほど、物語世界と讀者の距離は開いていく。そのかわりに、讀者の解釋の餘地が狭まり、作品が設定する情報（公式設定とでも言うべきか）を傳達する際の正確性は増す。『水滸傳』におけるマイナス呼稱の使用は、讀者と物語世界を近づけながらも、作品が設定する價值觀念を効果的に傳達するという、二つの機能を同時に果たしているのである。

實際の口頭藝能の場においても、講釋師が「那厮」「那賊秃」などの呼稱を用いて悪玉人物を語り、善玉人物に感情移入しながら物語を聞いている聴衆の共感を煽る、といったことは大いに有り得ると思われる。大木康氏は白話小説の文章について、「講釋師が觀客の前に話を語っている寄席の状況を録音したらこうなるであろう、ということを用意した書き方」であり、「小説の作者は口うるさい聴衆の存在を假定して敘述を進めているといえる」と説明している。¹⁹『水滸傳』に

おけるマイナス呼稱の使用は、口頭藝能の影響を感じさせるものであると共に、「讀むためのテキスト」という異種の媒體の中で、口頭藝能と同様の効果まで再現しようとした、その試みの一つとしても捉えられるのではないだろうか。

五 「肩入れした語り」から視點の「反映」へ ——金聖嘆本の改變

本稿の分析対象である容與堂本は、現在目し得る『水滸傳』のテキストのうち完全な形で残る最古のものであり、明の萬曆年間（二五七三～一六二〇）に刊行された。その後、征田虎・王慶故事二十回分を追加した百二十回本が世に出され、明朝滅亡附近の崇禎十四年（一六四二）、梁山泊集結後のエピソードを削除した（所謂「腰斬」）、七十回本『水滸傳』が金聖嘆の手によって刊行される。金聖嘆本では腰斬以外にも詩詞駢語を削ったり文章を書き換えたりといった改變が行われているが、その改變には呼稱に關係する部分もある。

【金聖嘆本】那和尚連手接茶。兩隻眼涎瞪瞪的只顧睇那婦人的眼、這婦人一雙眼也笑迷迷的只管睇這和尚的眼。自古色膽如天、却不防石秀在布簾裏一眼張見。早瞧科了二分、道「……原來這婆娘倒不是箇良人……」石秀一想、一發有三分瞧科了、便揭起布簾、撞將出來。那賊秃連忙放茶、便道「大郎請坐」這淫婦便插口道「這箇叔叔便是拙夫新認義的兄弟」〔四四〕

【容與堂本】那和尚一頭接茶。兩隻眼涎瞪瞪的只顧看那婦人身上、這婦人也嘻嘻的笑着看這和尚。人道色膽如天、却不妨石秀在布簾

裡張見。石秀自肚裡暗付道「……原來這婆娘倒不是箇良人……」石秀此時已有三分在意了、便揭起布簾走將出來。那和尚放下茶盞、便道「大郎請坐」這婦人便察口道「這個叔叔便是拙夫新認義的兄弟」〔四五〕

石秀が潘巧雲と裴如海の様子を窺い見て、二人の關係を怪しむ場面である。金聖嘆本では、作中人物の「眼」を強調する、石秀の疑念が確信にかわる段階を「二分」「三分」（最終的には「瞧到十分」と論理的に描く、「連手」「撞將」「連忙」などの連用修飾語によって描寫を精彩にするといった變更が見られるが、最も注目すべきは潘巧雲と裴如海に對する呼稱の變化である。ここまでずっと「婦人」「和尚」と比較的ニュートラルな呼稱で指示されてきた二人は、石秀が「三分悟った」のを境に「淫婦」「賊秃」と呼ばれるようになり、以降全て「淫婦」「賊秃」呼稱で統一される。

上記場面の後に描かれる法要のシーンで、金聖嘆は以下の評を加えている。へへ内に評を示す。

只見那淫婦（只見二字、總是那淫婦、那賊秃、那一堂和尚三段之頭、皆石秀眼中事）喬素梳粧、來到法壇上、手捉香爐、拈香禮佛。〈極寫石秀眼裏不堪〉那賊秃越逞精神、搖着鈴杵、唱動眞言。〈極寫石秀眼裏不堪〉那一堂和尚見……〔四四〕

評の内容には、「只見」二字、總て是れ「那淫婦」「那賊秃」「那一堂和尚」三段の頭なるは、皆石秀の眼中の事なり、「極めて石秀の眼裏の堪へざることを寫す」とある。この部分は全て石秀の眼中の出來

事になっており、「淫婦」「賊禿」の呼称には、視點人物である石秀の「見るに堪えない」というマイナスの認識や感情が反映されているというのである。以降は石秀が不在の場面でも「淫婦」「賊禿」が用いられ、石秀の待遇に沿った呼称使用が繼續される。つまり、金聖嘆本では石秀の認識の變化によって、地の文における潘巧雲と裴如海の呼称も變化しているということになる。そこからは非常に近代的且つ論理的な意識が伺われる。

一方容與堂本では、初めてマイナス呼称が用いられるのは法要のシンの後半、氣持ちの高まった潘巧雲が下女を使つて裴如海を呼び、いそいそと裴如海がやってくる部分(⑬那賊禿慌忙來到婦人面前)になっている。その後「賊禿」呼称に統一されることはなく、「賊禿」「和尚」「海闍黎」が混在した状態で物語が進む。石秀に肩入れた語り、石秀の待遇を反映した語りになっている點は共通するが、金聖嘆本と比べ、なぜ「この部分で」マイナス呼称を用いるのか、その使い分けの基準は明確でないと**言わざるを得ない**。

前節で述べた「悪玉人物の悪玉としての位置づけを強調する」「作中人物・語り手・讀者の距離を縮め、一體感を生む」といった機能を果たすだけであれば、容與堂本のように、部分的にマイナス呼称を用いるのも十分である。しかし、そこに新たな必然性と論理性を求めたとき、『水滸傳』は「讀むためのテキスト」として、更なる進化を遂げたと言えるよう。

おわりに

これまでの呼称や罵語に関する研究は、どのような作中人物がどのような語を發するかというセリフの分析が中心であり、地の文に目が

向けられることは稀であった。本稿では、『水滸傳』の地の文に注目し、作品の語り手がマイナス待遇の呼称によって作中人物を指示する現象について指摘した上で、その使用對象及び使用箇所に見られる傾向と、それらが「語り」において果たす機能や効果について考察した。ある價值觀念や思想を伝えようとする際に、物語はどのような表現を採るのか。多様な「語り」の一側面に切り込むことができたのではないかと思う。

今後は『水滸傳』他版本とのより詳細な比較、他の白話小説や戯曲作品との比較を通して、今回分析した容與堂本『水滸傳』における呼称使用が、白話文學の流れの中でどのような立ち位置にあるのかを検討していくと共に、「讀むためのテキスト」の上で展開される口頭藝術の模倣と藝術要素の排除が意味する問題についても考えていきたい。

一覽表

	回	呼稱表現	呼稱對象	內容
①	7	那廝	高衙內	那廝在東京倚勢豪強、專一愛淫妬人家妻女
*②	9	那廝	洪教頭	柴進一來要看林冲本事、二者要林冲贏他、滅那廝嘴
③	12	那廝	牛二	原來這人是京師有名的破落戶潑皮、叫做沒毛大蟲牛二…以此滿城人見那廝來都躲了
④	21	那廝	張文遠	這張文遠却是宋江的同房押司。那廝喚做小張三、生得眉清目秀、齒白唇紅……
⑤	24	這廝	西門慶	西門慶這廝一雙眼只看着那婦人、這婆娘也把眼偷睃西門慶
⑥	26	那廝	西門慶	這條街上遠近人家無有一人不知此事、却都懼怕西門慶那廝是個刁徒潑皮、誰肯來多管
⑦	26	淫婦	潘金蓮	武松伸手去凳子邊、提了淫婦的頭……
⑧	30	鳥男女	(蔣門神店) 酒保	武松帶一行人都到店裡看時、滿地盡是酒漿、這兩箇鳥男女正在缸裡扶牆摸壁扎掙
*⑨	30	這廝	武松	且叫送去機密房裡監收、天明却和這廝說話
⑩	30	那廝	兩箇公人	施恩見不是話頭、便取十來兩銀子送與他兩箇公人、那廝兩箇那里肯接……
*⑪	32	那廝	武松	眾人把武松推搶入去……擲在大柳樹上、教取一束藤條來細細的打那廝
⑫	33	那廝	劉高	劉高那廝終是個文官、還有些謀畧筭計
⑬	45	賊秃	裴如海	那賊秃慌忙來到婦人面前。這婆娘扯住和尚袖子、說道……
⑭	45	賊秃	裴如海	却說海閣黎這賊秃、單為這婦人結拜潘公做乾爺
⑮	45	賊秃	裴如海	期日約定了、那賊秃磨鎗備劍、整頓精神、先在山門下伺候着
⑯	45	賊秃	裴如海	原來這賊秃為這個婦人、特地對付下這等有力氣的好酒
⑰	45	賊秃	裴如海	那婦人道「師兄你關我在這里怎的」這賊秃淫心蕩漾、向前捧住那婦人說道……
⑱	51	娼妓	白秀英	那娼妓見父親被雷橫打了、又帶重傷、叫一乘轎子逕到知縣衙內
⑲	51	那廝	白玉喬	又怎奈白玉喬那廝、催併疊成文案、要知縣斷教雷橫命
⑳	65	這廝	張旺	張順在燈影下張時、却見是截江鬼張旺。原來這廝、但是江中尋得些財、便來他家使
*㉑	67	潑婦賊奴	賈氏·李固	盧俊義得令、手拿短刀、自下堂來、大罵潑婦賊奴、就將二人割腹剜心
*㉒	75	這廝	李虞候·張幹辦	見這李虞候、張幹辦在宋江前面指手劃腳、你來我去、都有心要殺這廝
㉓	75	男女	張幹辦·李虞候	這兩箇男女不知身已多大、裝煞臭么
*㉔	85	蠻子	梁山泊軍	且說定安國舅與同三箇侍郎……備細奏說宋江詐降一事、因此被那夥蠻子占了霸州
*㉕	85	蠻子	梁山泊軍	大遼國主准奏赦了歐陽侍郎。再說兀顏統軍、如何收伏這蠻子、恢復城池
㉖	97	那廝	鄭彪	且說鄭魔君那廝、又引兵趕將來
㉗	98	那廝	杜微	秦明也把出本事來、不放方杰些空處、却不隄防杜微那廝在馬後……
㉘	98	那廝	杜微	杜微那廝躲在他原養的娼妓王嬌嬌家、被他社老獻將出來
㉙	100	賊臣	蔡京·童貫·高俅·楊戩 (以下四臣に略)	當此之時、却是蔡京、童貫、高俅、楊戩四個賊臣、變亂天下、壞國壞家壞民
㉚	100	賊臣	高俅·楊戩	兩箇賊臣計議定了、着心腹人出來尋覓兩箇廣州土人……
㉛	100	奸臣	四臣	四箇奸臣定了計策、引領原告人入內、啓奏天子
㉜	100	賊臣	四臣	盧俊義頓首謝恩、出朝回還廬州、全然不知四箇賊臣設計相害
㉝	100	賊臣	四臣	且說蔡京、童貫、高俅、楊戩四箇賊臣計較定了……
㉞	100	奸臣	四臣	上皇無奈、終被奸臣讒佞所惑
㉟	100	賊	高俅·楊戩	眼見得這使臣亦是高俅、楊戩二賊手下心腹之輩
㊱	100	奸臣	四臣	天數只註宋公明合當命盡、不期被這奸臣們將御酒內放了慢藥
㊲	100	賊臣	四臣	宋江已知中了奸計、必是賊臣們下了藥酒……
㊳	100	賊	四臣	上皇終被四賊曲為掩飾、不加其罪

注

(1) 本稿では、作中人物の發話（心内語を含む）を直接的に再現している部分を「セリフ」、版本文の特徴として基本的に改行及び一字下げの處理が行われる韻文もしくは美文體の部分を「詩詞駢語」、上記二つのどちらにも當てはまらない、物語全體の語り手による語りと見做せる部分を「地の文」と定義する。

(2) 辻村敏樹『敬語論考』（明治書院、一九九二年、一三二頁）

(3) 古典白話小説研究で「待遇」の概念を用いている先行研究には、管見の限りでは荒木典子「水滸傳の待遇表現」（『開篇』第二一號、二〇〇二年）、邢文柱氏の諸論文（『三國演義』に見る待遇表現―侮蔑表現を中心に）（『比較文化研究』第六八號、二〇〇五年）などがあるが、主に議論されているのはセリフにおける作中人物の待遇であり、語り手の待遇問題を明らかにしようとする本稿とは趣旨を異にする。また、「待遇」の語は用いられていないものの、語り手の待遇を表す呼稱に關連する内容を持つ先行研究としては、鈴木陽一『西遊記』における人物形象の再検討（二）―猪八戒と孫悟空（『言語文化研究』創刊號、一九八一年、一三五―一三六頁）に「八戒は、三藏や悟空のみならず、この小説の語り手からも、獸子（バカ）と言われている。小説の地の文で、終止「バカは言った」と記述されるなどは中國小説史上稀有のことと言ってよい」との指摘があるほか、小松謙『現實』の浮上―「せりふ」と「描寫」の中國文學史（汲古書院、二〇〇七年）に『清平山堂話本』の地の文における敬稱の使用や『水滸傳』の「婆娘」（小松氏は蔑稱としている）について言及がある。

(4) 百回本は『明容與堂刻水滸傳』（上海人民出版社、一九七五年）、百二十回本は『一百二十回的水滸』（香港商務印書館、一九六九年）、七十回本は『第五才子書施耐菴水滸傳』（古本小説集成、上海古籍出版社、一

九九〇年）に據る。

(5) この部分は虚構の聞き手が顯在化して疑問を投げかけ、虚構の講釋師が解き明かすという構造になっている。

(6) 山崎直樹「テクストの繼續性と固有名詞」（『早稻田大學大學院文學研究科紀要』別冊第一四集、文學・藝術學編、一九八七年）は、人名のフルフォーム（例えば「趙雲」）、中間形式（趙雲の一部である「雲」）、ゼロ代名詞（主題の省略。「趙雲」も「雲」も使わない）という形式の違いが、隣接する文との繼續性の高低を示す可能性について論じている。筆者が取り上げた「魯達」「魯提轄」などに關しても、意味の繋がりが比較的弱い部分で呼び換えが行われている、と考えることはできるかもしれない。

(7) 仙石知子「舊中國の女性の名―排行による呼稱と親族稱謂語から」（『中國―社會と文化』第二十號、二〇〇五年）は、身分的に個別の名前が必要となる妓女や下女を除き、多くの女性にとつては順次を示す字と親族稱謂語による實用的な名（「五嫂」など）こそが必要不可欠であり、それ以外の名は無くても支障がなかったと述べている。

(8) プラスの待遇を表す呼稱については今回取り上げない。「英雄」「義士」など美稱と捉えられる呼稱が地の文で用いられる例も見られるが、單に梁山泊メンバーを表す語として使われている可能性も高く、別途考察が必要である。

(9) 白話作品における卑罵語に關する先行研究としては、主に以下の諸論考を参照した。野崎駿平「元の雜劇にあらわれた『詈詞』について」（『中國語學』第五八號、一九五七年）、塚本照和「紅樓夢における『詈詞』について」（『集刊東洋學』第一六號、一九六六年）、寺村政男「水滸傳」から「金瓶梅詞話」への變化―罵語を中心として（『中國總合研究』創刊號、一九七五年）、川島優子「『金瓶梅』罵語考―吳月娘の罵語

について」(『中國古典小説研究』第八號、二〇〇三年)、渡邊博文『紅樓夢』における罵倒語の類型と意味」(『人文研究』第一五六號、二〇〇五年)、李炳澤『咒與罵』(河北人民出版社、一九九七年)、文孟君『罵詈語』(新華出版社、一九九八年)、劉福根『漢語詈詞研究』(浙江人民出版社、二〇〇八年)また、辭書類には主に以下を参照した。張相編著『詩詞曲語辭匯釋』(中華書局、一九五三年)、林紹德編著『詩詞曲語辭釋』(四川人民出版社、一九八六年)、陸澹安編著『小説詞語匯釋』(上海古籍出版社、一九六四年)、羅竹風主編『漢語大詞典』(上海辭書出版社、一九八六年)、劉法白、劉鏡芙編著『水滸語詞典』(上海辭書出版社、一九八九年)

(10) 高島俊男『水滸傳の世界』(筑摩書房、二〇〇一年、一九頁。初出は大修館書店、一九八七年)

(11) 『水滸傳』の中で「婦人」と共に頻用される「婆娘」は、婦女の通稱としても妻を意味する呼稱としても使用され、陶宗儀による元末明初の隨筆集『南村輟耕錄』卷十四(中華書局、一九五九年)「婦女曰娘」の條には「謂婦人之卑賤者曰某娘、曰幾娘、鄙之曰婆娘(婦人の卑賤なる者を謂ひて某娘と曰ひ、幾娘と曰ひ、之を鄙しみて婆娘と曰ふ)」とあり、蔑稱であるとされる。「婦人」と等價の呼び換えをしている場合が多いという理由から、今回「婆娘」をマイナス呼稱に含めることはしなかったが、その指示對象がほぼ悪女に限定されていること、セリフ内で罵り語に用いられていることなどを鑑みるに、「婦人」よりもマイナス待遇の度合いが強い語として使用されている可能性も考えられる。

(12) 中鉢雅量『中國小説史研究—水滸傳を中心として』(汲古書院、一九九六年、一八七頁)参照。また、笠井直美『『水滸』における「對立」の構圖』(『東洋文化研究所紀要』第一二二號、一九九三年、七二頁)は、百二十回本に「好漢の凶惡な側面を抹消したり自立たためようにし、或い

はその正義を強調し、或いは敵役の「惡」「毒」を強調して、好漢と敵役の敵對關係が「善玉<の惡玉」の對立の圖式として讀まれるように要請する、かなり顯著な傾向が存在する」と述べる。挿増部分のマイナス呼稱も敵役の惡を強調した結果と言えるかもしれない。

(13) 拙論『水滸傳』の語りをめぐる考察—人物描寫を中心に』(『東方學』第一二六輯、二〇一三年)

(14) 『完譯水滸傳』(吉川幸次郎、清水茂譯、岩波書店、一九九八年、卷三、三三二頁)

(15) 『水滸傳』ではほとんどの發話文の前に「道」がついており、引用符號と同等の働きをしていると考えられる。

(16) 小松、前掲注(3)、二三八頁。ただし一覽表の*部分は金聖嘆本でも變更されていない。

(17) 申丹『敘述學與小説文體學研究』(第二版、北京大學出版社、二〇〇一年)第十章第四節「中國小説敘述中轉述語的獨特性」、中里見敬「中國語の自由間接話法について」(『東アジア文化交渉研究』別冊第七號、二〇一一年)を参照。西歐言語において、發言者や思考者を示す傳達部(彼はと言った)等を伴わず、時制と人稱が語り手の視點になっている敘法を自由間接話法、時制と人稱が作中人物の視點になっている敘法を自由直接話法と呼ぶ。中國語では時制による動詞の形態變化が起らないため、兩者を區別するには人稱に據るしかないが、主語が省略されている場合、兩者を判別することはできなくなる。申丹氏はそのような文を自由間接話法と自由直接話法の「兩可型」と名付け、中里見氏もまた兩者の區分を捨象し、一括して「自由式話法」と命名している。この他、橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩學』(水聲社、二〇一四年)は、「兩可型」や「自由式話法」を、作中人物の内的言語や内的感情が作中人物に重なるようにして語られるという特徴があることか

ら、「オーバーラップした語り」と呼んでいる。

(18) 「二重の聲」は、自由間接話法の機能を論じる際に多く用いられる表現である。前田彰一『物語の方法論―言葉と語りの意味論的考察』（多賀出版、一九九六年、二〇三〜二〇四頁）は、體驗話法（自由間接話法）について「語り手が登場人物の内面へ身を移し入れ、その人物の視点から語ることによって、語り手の聲と登場人物の聲を二重化する方法である。このために體驗話法は、『二重の聲』とか『二重の視点』と呼ばれるのである。これによって描寫は、語り手に媒介されるよりも、より大きな直接性を獲得する」と説明している。自由間接話法、或いは前掲注(17)で紹介した「兩可型」「自由式話法」「オーバーラップした語り」の機能は、『水滸傳』におけるマイナス呼稱を用いた敘述の機能と共通していると思われる。

(19) 藤井省三、大木康『新しい中國文學史 近世から現代まで』（ミネルヴァ書房、一九九七年、三三頁、八〇頁）

(20) 高島、前掲注(10)に詳しい。なお、金聖嘆本は百二十回本を底本にしていると考えられるが、引用部分における容與堂本と百二十回本の異同はほぼないため、直接容與堂本との比較とした。

(21) 潘巧雲と裴如海のエピソードは金聖嘆本の中で特に周到に手が加えられている部分である。一覽表に挙げたその他の呼稱に關しては、⑫「劉高那厮」の「那厮」を削除、⑬「娼妓」を「花娘」に變更する以外、容與堂本との違いは見られない。

【一覽表の日本語譯】

①こやつは東京で權勢を笠に著て、他人の妻に手を出してばかりいた。②柴進は一つには林冲の腕前を見たいと思ひ、二つには林冲に勝つてもらつてやつを嚙ませてやりたかつた。③さてこの人は都で有名なごろつき、人

『水滸傳』の人物呼稱に見える待遇表現

呼んで没毛大蟲の牛二……そのため街中の人々はこやつがやつて來たと見るとみな隠れてしまふのだつた。④この張文遠は宋江と同僚の押司。こやつは小張三と呼ばれており、眉目秀麗で齒は白く唇は紅く……⑤西門慶のやつが一對の目でひたすら女を見つめると、この女もまた西門慶を盗み見する。⑥この街の住人でこの事を知らない者は誰一人としていなかったが、みな西門慶のやつは悪黨ごろつきだと恐れ、口を出そうとはしなかつた。⑦武松は腰掛けのあたりに手を伸ばし、淫婦の頭を持つと……⑧武松が一行を連れて店に行つて見れば、一面酒浸し、二人のくそ野郎は酒壘の中でもがいている最中。⑨そして留置所に送つて監視させ、夜が明けたらこやつと話をつける（ことにした）。⑩施恩は話にならないと見て十兩あまりの銀子を差し出したが、こやつら二人はどうしても受け取ろうとせず……⑪人々は武松を押し込め……大きな柳の木にくくりつけ、籐のむちを取つてきてこやつを厳しく打てと命じた。⑫劉高のやつはやはり文官というだけがあり、それなりに謀略を身につけていた。⑬くそ坊主はいそいと女の前へやつて來た。女は和尚の袖を引つ張り、言うことには……⑭ところで海圍黎のくそ坊主は、偏にこの女を目的として潘公を義父と仰いだのだつた。⑮約束の日は決まつた。くそ坊主は手ぐすねをひき、心の準備を整え、先に山門の下で待ち構えていた。⑯そもそもこのくそ坊主はこの女目當てに、わざわざこのような強い美酒を用意したのだつた。⑰「兄さん私をここに押し込めてどうしようというの」と女が言うと、このくそ坊主は淫らな氣持が揺れ動き、進み出て女を抱きしめながら言うことには……⑱この娼妓は父親が雷横に殴られ、重傷を負うのを見ると、かごを呼んで眞つ直ぐに知府の屋敷へ向かつた。⑲その上なしろ白玉喬のやつが調書の作成を急ぎ立て、知府に雷横を死刑に處するよう求めたのである。⑳張順が灯りの影で見ると、なんと截江鬼の張旺である。そもそもこやつは川の中で財物を得ては、この家で散財しているのである。㉑盧俊義は指示を受け、短刀を手に自ら堂を下りて行くと、大いに潑

婦賊奴を罵り、二人の腹を割いて臓器を抉り出した。②李虞候と張幹辦が宋江の前で好き勝手振る舞うのを見て、みな心にやつを殺してやろうとの思いが湧き上がった。③この二人の野郎は身の程も知らず偉ぶっていた。④さて定安國舅と三人の次官は……宋江の偽りの降参の事、それによつてあの南方人どもに覇州を占據されたことを仔細に奏上した。⑤大遼國王は上奏を認め歐陽次官を赦免した。そして兀顔總司令官に、如何にしてこの南方人どもを退治し城市を取り戻すか尋ねた。⑥さて鄭魔君のやつはまたしても兵を率いて攻めて來た。⑦秦明もまた本領を發揮し、方杰に些かの隙も與えなかつたが、圖らずも杜微のやつが馬後におり……⑧杜微のやつは、彼がもともと世話をしていた娼妓王嬌嬌の家に隠れていたが、その主人によつて突き出された。⑨この時には、ちやうど蔡京、童貫、高俅、楊戩の四人の賊臣が、天下を亂し國や家や民を害していた。⑩二人の賊臣は計略を決めると、腹心を遣つて廬州の土地の者二人を探して來させ……⑪四人の奸臣は計略を定め、原告人を連れて参内し、天子に奏上した。⑫盧俊義は頓首して恩を謝し、朝廷を出て廬州に戻つたが、四人の賊臣が殺害を企んでいるとは全く知らずにいた。⑬さて蔡京、童貫、高俅、楊戩の四人の賊臣は計略を定め……⑭上皇は如何ともし難く、ついに奸臣たちの讒佞に惑わされるところとなつた。⑮明らかにこの使臣もまた高俅、楊戩二人の賊の腹心の輩であつた。⑯宋公明の命はまさに盡きる天命、期せずしてこの奸臣たちによつて御酒の中に運行性の毒薬を入れられ……⑰宋江は既に奸計にはまつたことに氣付いた。賊臣たちが毒酒を寄越したに違いないと。⑱上皇は結局四人の賊に誤魔化され、罪を加えることはなかつた。